

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00477

研究課題名（和文）微視的類型論・機能主義的観点によるバルト海周辺諸語の否定の地域言語学的研究

研究課題名（英文）Regional Linguistic Study of Negative Expressions in Circum-Baltic Languages from the Perspectives of Micro-typology and Functional Linguistics

研究代表者

佐久間 淳一（Sakuma, Junichi）

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：60260585

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、『星の王子さま』及び『ハリーポッターと賢者の石』の平行・コーパスを活用するとともに、母語話者から聞き取り調査を行うことにより、バルト海周辺諸言語（特にフィンランド語、エストニア語、アイスランド語、フェーロー語、デンマーク語、リトアニア語、ロシア語）の否定表現について、微視的類型論及び地域言語学の観点から対照研究を行った。特に、否定表現の多様性と言語間の異同について明らかにするとともに、否定表現とそれが文中で取り得る位置との間の関係や、否定が格枠組みに与える影響に関して、当該言語のみならず、近接する他の言語の視点も加えることで、より深い考察を行うことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『星の王子さま』及び『ハリーポッターと賢者の石』の平行・コーパスを用いてバルト海周辺諸言語の否定表現について対照研究を行った結果、系統的に近い言語であっても、使用される否定表現の間にずれがあることがわかった。他方、否定表現の位置が変わったり、否定の影響で格標示が変わったりする現象に関して、個々の言語の記述においては周知のことであったとしても、他の言語との対照という視点を入れることによって、当該の現象をより適切に類型論的な記述に位置づけることが可能となった。これらのことは、本研究が微視的類型論及び地域言語学の観点を採用したことによって得られた成果であり、その学術的意義は高いと言える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we conducted a contrastive study of negative expressions in Circum-Baltic languages (especially Finnish, Estonian, Icelandic, Faroese, Danish, Lithuanian, and Russian) from the perspectives of micro-typology and regional linguistics, utilizing the parallel text corpora of "The Little Prince" and "Harry Potter and the Philosopher's Stone", and interviews of native speakers. We examined, in particular, the diversity of negative expressions and their differences among Circum-Baltic languages, and analyzed in depth the relationship between negative expressions and their possible positions in sentences and the effect of negation on case frameworks, by adding the perspectives of not only the language itself but also other languages in the vicinity.

研究分野：言語学

キーワード：平行・コーパス 微視的類型論 機能主義 地域言語学 フィンランド語 スカンジナビア諸語
バルト語

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

否定に関する先行研究は決して少なくない。しかし、否定は、そのスコープの解釈など、肯定文にはない論点が存在し、統語論的な考察の枠組みには収まり切らず、意味論や語用論とも関係する。研究の裾野が広いため、研究が進んでいる言語でも研究が尽されているわけではないし、ましてや言語一般における否定の全体像は未解明の部分が多い。

否定のスコープの解釈には様々な要因が関係するが、否定を表す要素の相対的な語順も解釈に影響を及ぼす。そもそもバルト海東部の諸言語では、否定を表す要素の出現位置が固定していない。また、西部の諸言語(北ゲルマン語)では、出現位置が比較的限られているものの、同系かつ近隣の言語で異なる位置に現れることもある。複文の主節が否定を含む場合、その否定の効果に従属節に及ぶかどうかに関して、「揺れ」が見られる場合もある。

このように、否定に関連して検討すべき問題は数多いが、これらの問題を包括的に取り扱い、かつ地域言語学的な観点から対照研究に取り組んだ研究は管見の限り存在しない。否定の解釈を決定するためには文脈上の手掛かりが必要となる。また、否定を表す要素の出現位置自体、文脈や情報構造の影響を受けている。しかし、統語論研究においては、文の構造に係る理論の精緻化が進む一方で、文の情報構造や文脈との関係については十分な注意が払われてこなかった。よって、これらの課題について、文脈や情報構造を参照しつつ、機能主義的観点から問い直すことは、本研究の核心をなす課題と言える。

2. 研究の目的

本研究は、以下の4点を目的とする。

バルト海周辺諸言語のそれぞれについて、否定を表す要素の出現位置や共起関係が意味解釈に及ぼす影響を、文脈や情報構造を参照しつつ、機能主義的観点から解明する。

微視的類型論の観点から の考察結果について、言語間の比較対照を行う。

得られた考察結果を踏まえて、否定に係る一般理論に修正や拡充の提案を行う。

否定が「語り」の組織化に果たす役割を解明し、機能主義的な統語理論を精緻化する。

また、本研究の学術的な独自性と創造性は、言語類型論的な課題の解決に、機能主義的な観点とともに微視的類型論の手法を取り入れることと、対象とする言語の共通資料として、本研究で構築・拡充するパラレル・コーパスを利用することにある。類型論研究は、系統や地域の異なる多くの言語を対照することで、言語に関する一般化を導き出そうとしてきたが、事実の羅列に終始したり、過度の一般化に陥ったりしてしまう場合も少なくない。それに対して、同じ系統の言語を対照する intragenetic typology や系統的に近い言語同士を対照する微視的類型論は、全体としては似通っている言語の中での違いに注目することから、統語的な「揺れ」が生じる理由の解明を通して、当該事象の探求を深めることが可能となる。また、パラレル・コーパスは、文脈的な要因を考慮する必要がある場合に威力を発揮するため、本研究が着目する文脈や情報構造の探究の資料としてパラレル・コーパスは最適と言える。

3. 研究の方法

本研究は、上記の目的を達成するため、以下の手順によって実施する。

フィンランド語、エストニア語、リトアニア語、ロシア語、スウェーデン語、デンマーク語、フェロー語、アイスランド語のパラレル・コーパスを拡充する。

パラレル・コーパスから、否定を表す要素の出現位置や共起関係等、本研究が取り扱う事象に関連して、異なる言語間で比較可能な事象を選定する。

選定した事象に関して、文脈との関係で他の表現が可能か、可能な場合、意味的な違いが生じるかどうか、母語話者にアンケート調査を行う。

各言語の調査結果を機能主義的観点から考察するとともに、考察結果を随時開催する検討会に持ち寄って、微視的類型論の観点から対照研究を行う。また、オンライン研究会を開催し、バルト海周辺及び他地域の言語の研究者と連携する。

4. 研究成果

van der Auwera & Krasnoukhova (2020:91-92) は、否定表現の種類として下記のことを挙げている。

I. 標準的否定 (standard negation)

Mary does not love him [standard negation 標準的否定]

II. 非標準的否定 (non-standard negation)

a. Mary does not love him at all [emphatic negation 否定の強調]

- | | |
|--|----------------------------------|
| b. Mary does not live here yet | [phasal negation 局面の否定] |
| c. I urge you not to talk to him | [subordinate negation 従属節の否定] |
| d. Doesn't Mary love John? | [interrogative negation 否定の疑問] |
| e. Don't listen to him | [imperative negation 否定の命令] |
| f. Fred is not a teacher | [ascriptive negation 帰属性の否定] |
| g. There are no blue tigers | [existential negation 存在の否定] |
| h. There are no blue tigers in France | [locational negation 存在場所の否定] |
| i. Nobody believes him | [negation of indefinites 不定代名詞] |
| j. No! | [prosentential negation 否定の文代用形] |
| k. Mary disagrees with me | [derivational negation 派生による否定] |
| l. He was without money | [privative negation 欠如的否定] |
| m. Don't be surprised if it doesn't rain | [expletive negation 虚辞的否定] |

標準的否定と非標準的否定合わせて14種のそれぞれに、個々の言語で別個の表現形式が用意されているわけではなく、同じ形式が複数の否定を表すことは当然あり得る。また、標準的否定で用いられる形式が、どの程度、非標準的否定を表すのに用いられ得るかも言語によって異なる。例えば、リトアニア語では、否定が、全体としてインド・ヨーロッパ語の古い時期の特徴をよく保持しており、否定標識である否定辞 *ne* は、述語の種類にかかわらず、どの述語文でも使われ、否定の接頭辞としても用いられる。また、否定の代名詞や副詞も一般的に *ne* をともない、単独では用いられない。そのほか、バルト海周辺諸言語を比較したところ、アイスランド語とフェーロー語では、否定の命令において、アイスランド語では進行形の否定による禁止表現が頻繁に使用されるのに、フェーロー語ではあまり使用されない、帰属性の否定において、アイスランド語では否定辞 *ekki* のみで表されるのに対し、フェーロー語では否定辞 *ikki* と不定冠詞を組み合わせて表されるという違いがあることがわかった。

- (1) *Ver-tu ekki að slóra þetta, [...]*
 be-you not to loaf.around this
 「ぐずぐずするな」[アイスランド語：進行形の否定]
- (2a) *[...] þetta er ekki kind, þetta er hrútur.*
 this is not lamb this is ram
 「これは子羊じゃなくて、これは雄羊だ」[アイスランド語]
- (2b) *[...] hatta er ikki eitt lamb, hatta er ein veðrur.*
 this is not a lamb this is a ram
 「これは子羊じゃなくて、雄羊だ」[フェーロー語]

思考動詞に関しては、思考の内容を否定する際、否定が従属節に現れるか、主節に現れるか、両方の可能性が存在する。このとき、どちらがどの程度選好されるかは言語によって異なる。例えば、『星の王子さま』の中では、同じ原文のアイスランド語訳が従属節の否定になっているのに、フェーロー語訳は主節の否定になっている例が観察された。また、デンマーク語には、思考動詞に導かれる従属節内に否定辞 *ikke* が含まれる場合、その否定辞を主節の中域副詞の位置に移動する文法規則が存在する。しかしながら、否定辞が従属節内にとどまったままの例も実際には存在することが知られている (Hansen & Heltoft (2011:1817-1818))。

- (3a) *Jeg synes, at det ikke smager godt.*
 I think that it not tastes good
 「私はそれは美味しくないと思う」
- (3b) *Jeg synes ikke, at det smager godt.*
 I think not that it tastes good
 「私はそれは美味しいとは思わない」

もし否定辞が従属節内にとどまることが許容されるのであれば、否定辞を主節に繰り上げる規則は義務的ではないということになるが、必ずということではなくても、否定辞を主節に繰り上げる方が望ましいということであるなら、とりわけ外国人学習者に対しては、否定辞の主節への繰り上げを義務的な規則として教授する方が望ましい。このことについて、日本人のデンマーク語学習者の否定辞繰り上げ習得状況を分析し、Grammatiknetvaerksmoedet(デンマーク文法学会)で意見交換を行った結果、特定の文脈がない限り、否定辞の主節への繰り上げの有無によって意味の違いが生じることは無い一方、否定辞は主節に繰り上げるのが一般的であり、そうしたことを踏まえると、外国人学習者に対しては、否定辞の主節への繰り上げを文法上義務的な規則として教授することが望ましいという意見が大勢を占める結果となった。思考動詞における従属節の否定と主節の否定に関する揺れについては、他の言語も含めて、より詳細な調査を行う必要がある。

思考動詞の否定の例からもわかるように、デンマーク語における否定はその位置に関して統語的な制約が厳しい。デンマーク語ほどではないにしても、一般に、バルト海周辺諸言語のうち西部の諸語、すなわち北ゲルマン語では否定要素の出現位置が比較的限られていることが知ら

れている。他方、東部の諸言語では、否定要素がより多様な位置に現れ得るが、どんな位置にでも現れることができるわけではない。このことに関して、フィンランド語の標準的な否定に用いられる否定動詞がどの位置に現れるかをパラレル・コーパスで調査し、エストニア語との比較を行った。なお、フィンランド語で標準的な否定に用いられる否定要素が否定辞ではなく否定動詞と言われるのは、当該要素が主語の人称と数によって形を変えるためである。調査の結果、『星の王子さま』のフィンランド語訳における否定動詞の出現位置は以下ようになった。

	主語顕示 倒置なし	主語顕示 倒置あり	主語省略 倒置なし	主語省略 倒置なし 前置あり	主語省略 倒置あり	計
主語が1人称	8	2	57	2		69
主語が2人称	3	3	8	0		14
主語が3人称	79	41	9	0		129
不定人称受動文			2	0		2
非人称・不定			28	2		30
存在文			7	2	10	19
所有文			9	0	9	18
義務構文			2	0	2	4
計	90	46	122	6	21	285

フィンランド語の否定文の基本的な語順は、主語 否定動詞 動詞 目的語だが、ここで、倒置とは、否定動詞が主語あるいは各構文で通常文頭に来る文要素の前に現れているということの意味し、また、前置とは否定動詞の前に通常とは異なる文要素（例えば他動詞文の目的語等）が現れることを意味している。この表の中でとりわけ注目すべきなのは倒置の有無で、倒置が起こると、通常は述語の意味的中心である動詞の直前に置かれる否定動詞が動詞と離れた位置に置かれることになり、しかも多くの場合、否定動詞が文頭に位置することになる。倒置の事例は否定全体の4分の1を占めており、例外的な現象とは言えない。また、フィンランド語では、文頭は焦点位置であるため、倒置の事例は、否定が文脈や情報構造、あるいは「語り」の組織化にもたらす効果を検証する上で重要な手掛かりになると言える。一方、否定動詞の位置に関する状況を、系統的には極めて近い関係にあるエストニア語と比較してみると、パラレル・コーパスのデータからも、エストニア語では、否定動詞と述語の中心である動詞が離れて置かれる例は極めて少ないことがわかる。

(4a) [...] - *en minä halunnut sinulle mitään pahaa, [...]*
not I want to you nothing bad

「君に悪いことは全く望んでいない」[フィンランド語：主語顕示・倒置ありの例]

(4b) “*Ma ei soovinud ju sulle halba, [...]*”
I not want to you bad

「君に悪いことは全く望んでいない」[エストニア語]

(5) *Kukkasia emme merkitse muistiin, [...]*
flowers not write down memory

「花は記録していない」[フィンランド語：主語省略・倒置なし・前置ありの例]

このことは、エストニア語の否定動詞が人称・数によって形を変えることをやめ、否定辞に近くなっていることと関係していると考えられる。他方、フィンランド語が否定動詞の位置によって何らかの文脈上の効果を表しているとするならば、同一の文脈である以上、エストニア語では同じ効果が、否定動詞の位置ではない他の手段によって表わされていることになり、この点については引き続き検討する必要がある。

フィンランド語やエストニア語に関しては、否定文で、直接目的語の格標示が分格に変わることが知られている。これと同様の現象はバルト語、スラヴ語にも見られ、いわゆる「否定の属格（生格）」と言われているものがこれに当たる。ただし、「否定の属格」は、古い時期にはバルト諸語・スラヴ諸語に共通して見られる現象だったが、現代語においては頻度や義務性の程度が言語によって異なり、リトアニア語やポーランド語では義務的であるのに対し、ラトヴィア語やロシア語では、否定文でも対格目的語が一般的となっている。否定文における格標示の交替は、義務的と見られるフィンランド語においても、主節の動詞が否定の時の従属節中の直接目的語の格標示については揺れが見られる。同じく交替が義務的なリトアニア語についても、パラレル・コーパスを用いて調査した結果、直接目的語が属格ではなく対格で現れる例は非常に少ないものの、皆無ではないことが分かった。さらに詳しく分析すると、動詞と目的語の語順が優勢なVO語順でない場合、つまり、OV語順の場合は、まれに対格目的語が許容されること、また、VO語順であっても、目的語が否定表現から遠いところに置かれている場合、対格目的語が許容されることがあることが明らかとなった。

- (6) *Ta knyga - tas žmogus ne-pasiėmė.*
 その.ACC 本.ACC あの.NOM 人.NOM NEG-持って行く.PAST.3
 「その本を [一定の間を置いて] あの人を持って行かなかった」
- (7) *Tėvas ne-uždraudė vaikui pasiimti*
 父親.NOM NEG-禁じる.PAST.3 子ども.DAT 持って行く.INF
ta knyga / tos knygos.
 その.ACC 本.ACC / その.GEN 本.GEN
 「父親は子どもにその本を持って行くことを禁じなかった」

否定の属格(及びそれにとって代わる対格)の出現をめぐることは、動詞の意味特徴、構文のタイプ、文脈との関係等の観点からもさらに詳しく検討する必要がある。他方、地域言語学的観点からすると、バルト諸語・スラヴ諸語に共通して見られた否定の属格が、スラヴ語派のポーランド語には残っているにもかかわらず、リトアニア語と同じくバルト語派に属するラトヴィア語にはほぼ残っていないことは興味深い。ラトヴィア語に否定の属格が残っていないのは、ドイツ語の影響によるものと考えられるが、バルト海周辺諸言語における地域的な言語接触とそれによる通時の変化を正確に捉えるためにも、否定の属格に関して、リトアニア語と周辺言語の実態を詳細に把握する意義は大きいと考えられる。

以上、本研究では、バルト海周辺諸言語における否定について、関連するいくつかの観点から考察を行った。その際、近隣かつ系統が近い言語との比較対照も行った結果、微視的類型論の観点ならびに地域言語学的な観点の有効性を示すことができた。もちろん、本研究の一環として、新潟大学人文学部の江畑冬生教授を講師として招いて行った研究会で得られた、サハ語とトゥバ語の否定に関する知見は、本研究にとっても示唆に富むものであり、本研究を通じて明らかになった論点について検討を続けるに当たっては、バルト海周辺地域以外の言語の知見も積極的に取り入れていきたい。その上で、微視的類型論及び地域言語学の観点からの分析もより精緻化し、バルト海周辺諸言語の否定に関する諸課題について一層考察を深めていきたい。

参考文献

- Arkadiev, Peter M. 2016. Long-distance Genitive of Negation in Lithuanian. In: Holvoet, Axel et al. (eds.), *Argument Realization in Baltic*, 37-82. John Benjamins.
- Hansen, Erik & Lars Heltoft. 2011. *Grammatik over det Danske Sprog. Bind 3. Sætningen og dens konstruktion*. Syddansk Universitetsforlag.
- van der Auwera, Johan & Olga Krasnoukhova. 2020. The typology of negation. In: Viviane Déprez & M. Teresa Espinal (eds.), *The Oxford Handbook of Negation*, 91-116. Oxford: Oxford University Press.
- Vilkuna, Maria. 2015. Negation in Finnish. In: Miestamo, Matti, Anne Tamm & Beáta Wagner-Nagy (eds.), *Negation in Uralic Languages*, 457-485. John Benjamins.

本研究の開始当初に研究分担者だった大阪大学人文学研究科の當野能之准教授におかれましては2023年3月21日に逝去されました。早過ぎるご逝去は誠に残念でなりません。謹んでご冥福をお祈りいたします。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大辺理恵	4. 巻 24
2. 論文標題 「「それほど高くない程度」を表す meget について」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 IDUN—北欧研究—	6. 最初と最後の頁 81-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/87439	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 入江浩司	4. 巻 16
2. 論文標題 アイスランド語とフェーロー語の否定表現の概要	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集言語・文学篇	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/0002000557	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 SAKUMA, Jun'ichi
2. 発表標題 On Passive Voice and Resultative Aspect of the Finnish Language
3. 学会等名 13th International Congress for Finno-Ugric Studies（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Obe, Rie
2. 発表標題 Om placeringen af ikke i forbindelse med de danske meningsverber — hvordan de japanske studerende kan laere at saette ikke paa den rette plads —;（デンマーク語の思考動詞とともに用いられる ikke の位置について—日本人学生はどのようにして ikke を正しい位置に置くことを習得できるか—）
3. 学会等名 Grammatiknetvaerksmoedet（デンマーク文法学会）（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	入江 浩司 (Irie Koji) (40313621)	金沢大学・人文学系・教授 (13301)	
研究分担者	當野 能之 (Tohno Takayuki) (50587855)	大阪大学・大学院人文学研究科(外国学専攻、日本学専攻)・准教授 (14401)	削除：2023年4月27日
研究分担者	大辺 理恵 (Obe Rie) (80648949)	大阪大学・大学院人文学研究科(外国学専攻、日本学専攻)・講師 (14401)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	櫻井 映子 (Sakurai Eiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------